

# ショートスピアは裏切 らない

三田六郎

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

時空管理局のお膝元、第一世界ミッドチルダより次元を隔て幾星霜。陸士達は異郷の空に見守られ、今日も今日とて異郷の大地を駆け巡る。「陸士なら足を使え」、先任は後輩に語る。彼らは飛べない。何故なら彼らは鳥に非ず、はたまた空士にも非ず。いつだって、地を這うのは翼を持たぬ選ばれなかった人間たちである。だが、彼らにしか見えない景色も、そこにはある。とある陸士は——彼女は、それを確かに知っていた。

# 目次

キツカさんの業務日誌

- 1 e p. 1 親の言葉は侮れない



## キツカさんの業務日誌

## e p. 1 親の言葉は侮れない

『いいかいキツカ。喧嘩になったら、まず目を狙いなさい』

三歳の夏、父にそう教えられた。大抵の子供は顔面パンチにビビって戦意を喪う。時折いる気合いの入ったガキ大将でも、視界を潰されれば恐慌に陥らざるを得ない。子供の喧嘩など、ビビらせたもん勝ちだ。但し、露骨にやっつては駄目だ。見え見えの手は反撃を招きやすく、危険が増す。故に、やはり先手必勝を狙え。

笑顔でそう説く父には、子供ながらにドン引きだったと、キツカはかつての情景を振り返る。

空が碧い。見慣れたクラナガンの空のスカイブルーではない。碧玉を溶かし混んだかのような、煌めくエメラルドの大気が、空を覆っている。こちらもまた、三年も見ていれば嫌が応にも慣れてしまう。いつの間にか、これもまた味があると思える。そうなって初めて、先任から一人前と認められるのだ。

広い次元世界をいくつか回れば、こういった景色は結構な回数を見ることができ。大して珍しいものではない。

視線を下げる。いつまでも空ばかり見ていては、仕事もろくに終わらない。視界に入るのは、鬱屈した表情をその顔に貼り付けた男達である。身形は一様に薄汚れており、粗野な印象を受ける。半数ほどは気を失っていた。その眼光は暗く沈んでいるが、彼らは皆して親の仇に送るような熱い——敵意に満ち溢れた——視線を、キツカに注いでいた。

思わず、溜め息を漏らす。彼らは揃いの拘束具——リングバインドにより後ろ手に縛られ、ついでとばかりに両足も縛られている。勿論、武装解除も済んでいた。芋虫さながら地面に転がりながらキツカを睨み上げることしか出来ない癖に、何とも気丈なものだ。もつとも、これからの展開を考えれば彼等の気持ちもわからなくはない。が、言葉を掛けるでもない。そんなことを口にした途端、罵詈雑言の嵐が叩き付けられることは、目に見えていた。

「ひい、ふう、みいの……十と三、か。やつぱり五人足りない」

戦闘後、キツカは初めて声を出した。男たちを縛り上げる作業の間も黙っていたが、ここに来ては口も開く。改めて確認した情報を周囲を警戒している同僚達に伝えて行く。戦闘に参加した人員は全部で八名だが、この場にいるのはキツカを含め三人。所謂見張り役である。他の五人は、逃げ出した奴等を追撃に出ている。

どいつもこいつも荒事慣れした畜族のような武闘派である。彼らが官権の一翼を

担っていることに、不安を覚えるほどである。数では同じだが、実力差は歴然。すぐさま追加で五人の芋虫が運ばれてくるだろう。ジャンケンに負けたキツカ以下三人はそれを待つばかりであつた。

残つた仕事は形だけである。

「クソツ、管理局の狗め!!」

すっかり緊張感の無いキツカ達に思うところがあつたのか、芋虫男の一人が、いかにも使い古された罵声を浴びせる。浴びせられた側も、最早耳にタコである。彼らに捕まつた犯罪者は皆押し並べてこの言葉を口にするのだから、何らかのマニユアルでもあるのかと疑つてしまう。

そんなキツカの内心も無視して、男は唾を飛ばし続ける。

「ここは我々の国! 我々の星だ! 貴様等よそ者風情に、明け渡してなるものか!」

彼に呼応してか、他の芋虫達からも威勢のいい賛同の声、キツカ等への雑言が沸き上がる。それはよろしいのだが、彼らは自らの体勢を忘れているのだろうか。地面に転がりながらやいのやいのと騒ぎ立てる数人の男たちの囃は、中々にシユールであつた。

この手合いには腐るほど出会つてきたが、まともに応えてもキリがないことをキツカは知っている。しかし、今の彼女は暇であつた。依然として、同僚の捕物は続いている。空を見て時間を潰しても良いが、それも過ぎれば首が痛くなる。キツカはゆつくり

としやがみこんで、芋虫のうちの一人、真つ先に声をあげた中年の男と視線を合わせた。色素の薄い、鳶色の瞳が男に突き刺さる。

「いやね、私らの仕事は、別に侵略してきたわけじゃなくてさ。むしろあんた方の政府からの依頼で駐在してるわけだね。流石に分かるでしょ、そろそろさ。何年やってんだって話よ、お互いに。あんた等も、うちでどうしようかってんじやないの。そつちの政府に引き渡すことになってるから、文句があるならそこでお願いします」

「黙れ小娘が！ 一元はと言えば貴様等が口を挟まなければ！」

やはり、人の話を聞かない。紋切り型のリアクションに、分かっていたことだがキツカは失望していた。彼らとて各個の主義信条利益の下で行動しているだろうに、こゝも同じ反応をされては芸がない。オリジナリティとか、そういうものは彼等の組織活動には必要ないのだろう。

身をよじりながらも高説を打ち続ける芋虫には悪いが、キツカはもう話を聞いていなかった。よいしよと立ち上がり、濃紺色のズボンのシワを伸ばす。バリアジャケツトなので手入れは不要だが、見た目がよれているのは宜しくない。一応は、キツカとて女なのだから見た目に気を配らないでもないのだ。その配分が、他の女子連中よりも低いことは自他ともに認めるところである。

ともあれキツカは、またぞろ騒ぎ出す男たちを完全に無視して、ふと、先ほど脳裏に



浮かんでいた古い記憶に思いを馳せていた。

何故今になって、二十年も前の風景を思い出したのだろうか。それも、父にまつわること。

感傷的になっているのか。どうもらしくない。特別何かあるわけでもない、普段通りの任務である。現地政府に委託された、反抗分子の捕縛任務。かれこれ五年近く従事しているが、この世界は中々落ち着いてくれない。捕まえても捕まえても、雨後の竹の子じみた頻度で、新手が現れる。

いい加減にすればいい。何事も、丁度良い地点がある。そのポイントを見切れないものは、最終的にどん詰まりに陥るのだというのが、キツカの持論であった。

そう考えると、今の自分はどこに立っているのか。自身の立ち位地もそうだが、何よりも己の自分を見極めるのが、中々に難しい。それは熱意だったり目標だったり、使命感、正義感、あるいは野心や出世欲と呼ばれるものへ向かって行く何かである。局員として六年ほど勤めているが、キツカには未だに「これだ」と思える答えは見つかっていない。仕事を続けているのは、惰性に近いものがある。歴とした目標を掲げている分、芋虫達の方がましかもしれない。あまり偉そうなことは言えない身分である。

つらつらと考えていると、見張り役の一人がキツカを呼び止めた。

「陸曹、追撃組からの連絡です。逃走した五人の内、四人を確保。一人はまだ捕捉できて

いないようで、まだ暫くは追跡を続けるとのことだ」

仲間からの報告を伝えるのは、キツカの三歳年下の、二等陸士である。まだ若い、二十歳にもならない澆刺とした青年である。短く刈り込んだ金髪が、よく似合っている。

「ありや、あの人らでも取り逃がすか。結構な手練れかな、そいつは」

「先ほどの戦闘記録では、簡易判定ですが、最大出力でAランク近い奴が居ましたから。おそらくそいつでしょう」

「ああ、あの派手に立ち回った奴ね。確かに、動きはやたら機敏だった」

今しがたの戦闘劇、ほぼ一方的に局員側の攻撃で蹴散らしたレベルの戦いだが、反抗分子の中に一際良い動きをする者がいた。とは言え訓練された複数の局員を相手にしては、逃げに徹するので精一杯だったようにキツカには見えていたが、案外と粘るものである。キツカ自身は直接対峙したわけではないが、端から見てもそこまでの腕前には見えなかったのだ。魔力はそこそこに感じられたが、あれで戦闘派陸士五人から逃げ切れるものかと、疑問は残る。陸士達のランクが軒並みBランクであるとはいえ、戦歴も経験も圧倒的に彼等が上である。魔力量だけでひっくり返る戦場というものは、現実には滅多に無い。

そこで、頭上を飛び交う会話内容が琴線に触れたのか、転がっていた男達が不適な笑みを浮かべた。取って置きの自慢話をしたくてたまらない、糞餓鬼のような笑みだ。

これは聞いてやるべきかと、キツカは水を振った。

「なんか用かね？」

「クツクツクツ、貴様等、まさかもう終わった気ではないだろうな？ その傲慢が、貴様等自身に報いとなって襲いかかるのだ」

「そう言うのいいいで、言いたいことあるならさっさと話しなさいって」

露骨に眉を寄せて見せれば、相手は我が意を得たりと得意気な顔を晒す。それでいい。いい気になって口が軽くなるのは、この手合いのテンプレートである。

そんな思惑も知らずにか、男は更に舌を滑らす。仲間の誰もそれを止めないのだから、彼らの程度はたかが知れていた。

「貴様等に、あいつは捕らえられん。気付いているだろうが、あいつは我々の中でも頭抜けた魔導師。貴様等ごとき雑兵、為す術もなく返り討ちに遭うことだろう」

どうやら彼等にとつての切り札はまだ残っていたらしい。だが、とキツカは思う。

「よく言えるよ、まったく。あんた、じゃあ何でさつき本気出さなかったの、そいつは」  
「ククク、つくづく間抜けめ。まさか、我々が無策のままに貴様等に姿をさらしたと思っ  
ているのか……？」

この言いか、毘でもあるのか。俄に空気が張り詰めた。含みのある言葉に、三人の  
局員は各々反応を見せた。キツカはやはり眉を寄せ、二等陸士はしきりに周囲を窺い、

もう一人は追撃組に通信をいれている。最後の一人はキツカの一つ年下の、やはり二等陸士である。派手な赤髪だが、多少気が弱い青年である。つまるところ、追撃に行つてしまつた班長達先任を除いた、この場での最先任は陸曹であるキツカだつた。

仕事はまだ続くようだ。消化試合をしていたはずが、延長戦に突入した気分である。

「何する気だよ」

「馬鹿め、答えると思つたのか？ 精々気を張り巡らせることだな」

「そりゃあ、私らに忠告してくれてんの？ それこそ解せんね。あ？ おい。あんた等、余計な真似したら罪状が増えるだけじゃ済まんよ」

「知つたことか。貴様等の法などが我々に通じると思い上がるな、小娘が」

男達は、そこまで言つて完全に黙りこんでしまつた。鎮圧直後の態度に似ているが、そこに浮かぶ感情に決定的な違いがあつた。今の彼らにあるのは、挑戦のないけ好かないにやけ面である。

これ以上は喋りそうにないと見て、キツカは男の顔を蹴り飛ばす。容赦の無い一撃がにやけ面を沈黙させた。一挙に喧しくなつた芋虫達の喚き声を頭からシャットアウトして、彼女は二人の同僚に向き合つた。

「班長達に連絡はついた？」

「はい、あちらは異常無しだそうです。こちらからは、まだ何かある、注意されたしと伝

えました」

「追加で、極力早く帰投してくれとも伝えて。早いとこ引き上げたい。一人くらいならまた次にしようってね。さて、こっちはこっちで索敵強化な。サーチャーを密に。反応の一つも見逃さないようにね」

了解、と重なった返事に満足しつつ、キツカは頭を搔いた。灰色の長い髪が、さらにと波打つ。いつからか、風が強くなっている。砂埃がやたら発生する点は、この世界の数ある欠点のうちの一つだった。

仲間の意識を飛ばされたことがそんなに気に入らなかつたのか、未だに騒ぎ立てる五、六人の男達も順番に蹴りを入れ、沈黙させて行く。いい加減聞くに耐えなくなっていた。頓狂な悲鳴と鼻血だけを残し、彼らは静かになった。この程度の仕打ちは日常茶飯事なので、今更規則がどうか言う者はこの班には居ない。

デバイスにかじりついて魔力反応に目を光らせる二人を横目に、キツカは手の内の相棒で肩を二度ほど叩いた。彼女のデバイスはサーチャー等の補助魔法に秀でていないので、警戒は大抵アナログ頼みである。今も、周囲を見張るのはキツカの目と耳であつた。

辺りは、遮蔽物ばかりの林地である。罾を仕掛けるなり、伏兵を潜ませるなり、パターンの幅が広い。誘い込み型のトラップなども危惧したが、その規模の反応はサー

チャーには映っていない。

とすると、やはり鍵となるのは取り逃がした残り一人の存在か。あれが一体何をやらかしてくるのか、そう言うことなのだろう。

今一、男達の意図が読めない。彼らは、キツカ達に何をさせたかだったのか。危機感を煽るような文句を吐けば、警戒心も増す。そんなことをしては不意討ちの意味も薄れるだろうに。こちらの警戒が嚴重になることで、彼らに利があるわけも無からう。

もしくはハツタリだったのか。それにしても、言葉に自信があまりすぎる。その上、あの局面で虚勢を張る意味など無いことは、誰にだって分かることだ。……もう少し尋問しても良かったかもしれない。黙らせるのを早まったか？

感覚を研ぎ澄ませながらも、思考は止まらない。左肩に担いだ相棒も、妙に収まりが悪い。どうにも落ち着かない。汗が頬を伝う。心が乱されている。これを意図しての弄言だったならば、成る程、芋虫男達は大した策士である。

「なあんて、ねッ！」

背後。キツカは躊躇なく相棒を振り抜いた。利き腕の左。手応え有り。寸暇無く一閃を描いた一撃は、確りと獲物を捕らえていた。

「げっばばあ!？」

悲鳴をあげて何かが吹き飛ぶ。しかし、姿が見えない。事態に気づいた二等陸士の二

人が焦って振り向くが、彼らの目にはデバイスを振り抜いたキツカが見えるだけである。サーチャーにも、依然として反応は無い。

「おい、奇襲なら一撃で決めなきや駄目でしょう。あと殴られたからって声出さな、間抜け」

「ぐっ、が、クソオオ?!」

次の瞬間、空間がブレる。何もなかった筈の虚空から、滲み出すように男の姿が現れた。キツカはこの現象を知っていた。この世界では珍しいが、クラナガンでは幾人かの使い手とも会ったことがある。

痛みへのたうつ男にデバイスを突き付けながら、キツカは軽い調子で語り掛けた。

「幻術魔法……確か、オブティックハイドとか言ったかな、その類いか。流石Aランク、変わった魔法使えるね」

「くっ、ゲホッ、嘗めやがってエ……」

「しかし、解せん。あんたどうして、サーチャーに映ってないの。デバイスは正常だし、まさか、あつちの奴らが見落としたってことはあるまいし」

ちらりと眼だけで問い掛ければ、金髪も赤髪もぶんぶんと首を横に振っている。その必死さから見て、嘘はない。不可解な現象に、二人の若者は揃って困惑しているようであった。かく言うキツカも、手品のトリックは気になるところだった。

マジシャンとて飯の種を易々と明かしはすまい。どうしても知りたいならば、手段は幾つかに絞られる。交渉するとか、弟子入りするとか。これからキツカが行うのはまた別の、単純明快な方法である。

「実力行使つて奴さ。ふん縛つて聞き出してやるから、神妙にするといいよ」  
「管理局の狗めえええ!!」

「まあたそれか。聞き飽きたつて、言つてんだろが」

激昂し、キツカに飛びかかるかと思われた幻術魔法の男は、再び姿を消した。最優先で自らの有利を作りにいけるあたりは、意外にも冷静である。

目の前で急に消失した人間は、やはりサーチャーには影すら映り込まない。余程高レベルな魔力隠蔽術を持っているのか。それとも、何らかの特殊なスキルか。技術のお粗末振りを考えれば、おそらく後者であろう。

とは言え。

「種のばれた手品じゃ、私は騙せないよお、つと」

「うぎやあああ!!」

一足飛びで、キツカは地面を蹴つた。その動きは豹を思わせる。急に飛び掛かってきたキツカに目を白黒させている赤髪の陸士のすぐ後ろを、相棒で思い切り突く。近代ベルカ式の武骨な相棒は、容赦無く幻術男の眉間を貫く。殺しはしないが、かなり痛い



ことに変わりはない。

「背中しか狙えないの、あんた？ 折角消えてるんだ。もう少し頭捻れよ」

戦闘は、呆気ないほどすぐに終わった。倒れ伏しピクピクと痙攣している敵魔導師に、陸士二人が速やかにバインドを施していく。最後に少しとは言え一杯食わされたのが頭に來たのか、かなり手荒く芋虫にされている。

キツカは男が取り落としたものを拾い、眺める。幻術男の武装は、横流し品の当局製デバイスだった。総合性能は高くないが、バランスは良い。わざわざ背後に回り込まずとも、定評のある機動力を活かして死角から魔力弾の一発でも撃たれば、キツカ達もかなり苦戦しただろうに。

近接の間合いは、近代ベルカ式を使うキツカの得意とする間合いであった。その範囲なら、姿が見えなくても勘とスキルで賄えるのだ。

発想が貧困なのか。それとも出来なかつた事情でもあるのか。何にせよ、あたかもジョーカーの様にちらつかされたカードが、とんだブタであつたことは確かである。期待していたお仲間達も、エースの体たらくを聞けば浮かばれまい。

そうこうしている内に、追撃に出ていた五人が帰つてきた。その内四人は肩に簀巻きにされた芋虫を担いでいる。全員確保、確認。ようやく、今日の仕事は終わった。やけに疲れる一日だったと、キツカは肩を回す。

残り一人と言うところで獲物を逃したのが余程悔しかったらしい。小突き回して、先任達をあしらいつつながら、彼女達は拠点へと足を向けた。

相も変わらず、空は妖しい碧に煌めいていた。



キツカ達陸士部隊の拠点は、この世界の首都に間借りしている、管理局現地支部である。所属する戦力の殆どが陸士であり、管轄は建前上は地上本部になっている。実際は本局のテコ入れや口出しもしよつちゆうなのだが、それはまあ仕方ないことであつた。この支部は、成り立ちが少々複雑なのだ。

捕まえた反抗勢力達は、現地政府に引き渡すまでは支部の拘置所に拘束される。軽い尋問と、形骸化した調書作成。あとは見張り。これらの仕事は、まだ残っていた。キツカは運悪く、上司からこれらの内デスクワークを一手に任されてしまった。

慥然とした表情のままデスクに向かい、端末に指を走らせる。キツカは、そこそこ美人である。だが、残念ながら色気の無さも支部随一である。そのためか、仕事に励む彼女を茶化す同僚こそ居れど、肩代わりを申し出る好人物はついで現れなかった。

一時間程して、残業は終わった。データをまとめ、端末の電源を落とす。現場仕事からの内勤に、流石のキツカも軽くない疲労を感じていた。白い指で、こめかみと眉間を揉み解す。それだけで、大分楽になるものである。

「よう、お疲れさん。終わったか？」

「あ、班長。はい、今上がったところですよ」

労いの言葉を掛けたのは、よく日焼けした、見るからに現場主義な男——班長であつた。香ばしい匂いがキツカの鼻をくすぐる。班長の手には、湯気のたつマグカップが二つあつた。外見からは想像もつかないが、彼の淹れるコーヒ―は絶品である。有り難く、キツカは相伴に預かることにした。

「ほれ」

「いただきます」

片方をキツカに渡すと、班長は手近な椅子を引つ張りだし、どかりと腰を落とした。ここで一服入れる腹積もりらしい。丁度良かった。キツカにも、聞きたいことがあつたのだ。

「あいつ等、何か吐きましたか？」

「ああ、だが、大した成果はないな。大きなアジトもなけりや、主流派との繋がりも薄い。ありやあ完全に先走つた下ツ端どもだ」

「武器は官給の横流しでしたが」

「そつちも毎度のことさ。地下組織から出回つてる掻つ払い品だよ。有力な証拠にやならん」

御苦労なことだよ、まったく。班長は愚痴るようにこぼす。先日三十になったばかりの三等陸尉だ。尉官であるだけ、彼の職責はそれなりに大きい。気苦労も多いのだろう。その鬱憤を晴らすように現場では暴れまわるのだから、部下としては厄介なものがある。

「そういえば、最後に私らで捕まえた奴なんですけど」

「ああ、あのサーチャーに映らなかつたって奴か」

「はい、一応の予想は出来てるんですが。何か分かりました?」

「おう、それなんだがな、多分お前の予想通りだよ」

「てことは、レアスキルですか」

うむ、と班長は頷いた。班長曰く、筋骨粒々な『善良なお兄さんたち』で立て続けに詰め寄ったところ、あっさりと暴露したらしい。そのむさ苦しい画を想像して、キツカの顔に苦味が走る。口に含んだコーヒーのせいではない。

幻術男の手の種は、いたってシンプルなものであった。彼の魔力には、周囲の魔力に波長を同化させる特性があったのだ。平たく言えばカメレオンのようなステルス機能である。そのレアスキルに不可視魔法を組み合わせることで、文字通り『姿無き兵士』となっていたのである。

この世界は、独特の環境下にある。大気中の含有魔力が多く、視認できるほどの魔

力が碧の光となって空に渦巻いていた。それ故通常設定のサーチャーではノイズが大きき、この支部の陸士部隊ではサーチャーの感度を絞るのが通例である。そのせいで、背景に溶け込んだ幻術男の魔力反応を拾えなかったのだと判明した。

「へえ、便利なスキルですねえ。風呂とか覗き放題じゃないの。男の夢って奴ですか？」  
「否定はしないが、その感想を口に出すお前も大概に阿呆だな」

「女に幻想抱く坊主は、うちの支部に居ませんでしょ」

「いやあ、サンバーやルクラ辺りは、まだまだ青いぞ。俺から言わせりゃあ、お前だってまだまだ小娘なんだが……なんと言うか、どうもお前はババ臭いんだよ」

「訴えたら勝てるレベルですよ、その発言」

「自覚がないのか？ こりゃあ、重症だ」

ずるずるとコーヒーを啜りながら、キツカはジトリとした目線を投げ掛けるが、班長に懲りた様子はない。どころか、ぬけぬけと軽口まで返す。まあ、良い。いや、良くはないが、こんなことで過敏に反応しては、男ばかりのこの支部ではやっていけないのだ。逆に考えれば、ここでやっていくためにキツカは女子力維持を切り捨てるしかなかったとも言える。不可抗力である。断じて、彼女自身がババ臭いわけではない。

かつて同姓の友人から散々に扱き下ろされたことは脳内から除外し、キツカは思考を先程までの話題に向けた。

「まあ何にせよ、大層なこと言つてた割りには、とんだしょんぼりした結果でしたね」

「言つてやるなよ。あいつ等の中では、あれだけの魔法が使えりや腕利きを名乗るにや充分だったんだらう。窮地にエースを頼りたくなるのは、人間の性だよ」

「まさしく、井の中の蛙」

「だが、冷静に考えりや恐ろしく厄介な敵だよ。探知も効かず、視覚にも頼れない。一対一ならまだしも、乱戦になつちやあとことんこつちが不利になる。戦術の幅も広がる。能力だけを見れば、是非うちに欲しいところだ」

管理局お得意の『犯罪者の更正を見越した社会奉仕活動』で徴発して、現地協力者として取り込むことはできる。が、アレは流石に要らないなど、キツカは思う。班長も、『能力だけを見れば』と言つてゐる辺り、冗談で言つてゐるのだらう。

残念な味方は、時として頭の悪い敵より厄介だ。例えそれが、レアスキルホルダーであろうとも。希少価値が有用性に直結しないことは、現場の人間なら誰でも知つてゐる。

「あれ、接敵時は結構乱戦でしたよね？　なんであいつはあのスキル使わなかつたんでしよう」

「ああ、それがな。俺達が不意打ち気味に接触しただろ？　そのせいでテンパつてたらしい。仲間が捕まつてる内にちよつと落ち着いて、発動してから、お前ら留守組の様子

をこつそり覗いてたんだとよ。その点じゃ、無駄足踏んでた俺達はまんまと嵌められたわけだが」

最初からしようもないのか。成る程、つくづく残念な男である。しかし、と言うことは。幻術男は仲間達が意識を蹴り飛ばされるシーンを黙ってみていたのだろうか。それはそれで、何だか薄情な話だ。

「ひどい奴だなあ」

「お前が言うな。ルクラのデバイス記録で見たがな、アレ、現場じゃ何も言っていなかったが、サンバーもルクラも結構引いてたみたいだぞ」

「ハン、あいつ等もまだまだ甘ちゃんてことですよ」

ちよつとばかり年長を気取って、ニヒルな笑みでも作ってみる。にやあり。客観的に見れば美人顔であるし、涼やかな灰色の髪も相まってかなり絵にはなる。だが、対する班長の反応は冷ややかだった。

「いや、マジで。その直ぐ後にや見えない敵相手に大立ち回りだ。魔法だって身体強化だけだったろ。お前のインファイトがトンデモだったのには、俺達なら慣れてるが、あいつ等はそうでもない。サンバーの奴なんて『流星はキツカさん。マジパネツ』とか喧しいんだ」

「マジすか」

若々しい金髪の陸士は、どうやらキツカの過激な魅力にメロメロらしい。嘘である。任官三ヶ月目の新米管理局員には、ちよつとした暴力行為もまだまだ刺激的なのだ。この三ヶ月で彼は随分と成長——模範的な局員理念から見れば、好ましからざる方向に——したのだが、それでもまだ陸士訓練校の訓示は抜けきつていない。現場ではポカすることも減ってきたが、教育を続ける必要はありそうだ。これも、何だかんだでキツカの仕事になるのだろう。またも苦虫を噛み潰した渋面を作る。最近こんな顔ばかりしている気がするが、乙女の眉間に皺が出来たらどうしてくれよう。と、キツカは我ながら空寒いことを考えていた。

目を煌めかせる金髪の次に浮かぶのは、気弱な赤髪のドン引きした面である。簡単に思い描けるだけに、その顔が己に向けられていることを思うとどうにも面白くない。と言うか、腹立たしい。

「つつても、サンバーは兎も角、ルクラの奴は一緒にやりだしてからもう二年でしょ。今更あの程度のことです引くなと言いたい」

「そりゃあ、俺も思わんでもないが。あいつは、そもそも根が優しいというか、まあ、ナイーブな奴だからな」

「ルクラのくせに生意気な。配置換えしません？ 後方支援とかのが向いてますよ、あいつは。粗野な班長達と同じ釜の飯食つてる割りには、ドンパチ慣れしませんもん」



「おい、粗野って言ったかお前」

「さあ？　で、ルクラのことですよ。あいつもやればできるんだが、今のままじゃあ力を発揮する前に自爆しそうで不安です」

惜しいというか、勿体ないというか。キツカは独りごちた。話題の青年は、決して未熟なわけではない。仮にも未成熟な管理世界での駐在部隊の一員なのだ。一年以上にわたりアウエーで生き抜く技能を有しているのは、確かである。

「しかしな、本人が外勤希望なんだからしょうがないだろ。汲んでやらんと、ただでさえ人手不足なのに辞められちまうと困るだろ。支部長にどやされるのは俺だぞ？　俺だつて班長として気には掛けているんだ。なるべくお前と行動させてるのも、その一環なんだがな」

「……私ってそんなに喧嘩ツ早いですか？」

「いや、お前はうちの中でもクールな部類だ。頭も結構回るし、細かいことにも気がつく。だから任せられる。他の面子だと中身は勿論、見てくれからして乱暴だからな。新米坊やを無駄にびびらせちまっただろう」

「それは、誉めてくれてるんですか？」

「一応な」

「どーも」

「加えて、お前は荒事に巻き込まれる確率も、何故か高い」  
「それについては私も遺憾ですよ、まったく」

気弱な青年が何を思つて陸士となつたのか、キツカはあまり深く聞いたことがなかつた。淡泊に見えるが、これは個人間の距離感の問題だ。同僚として仲は悪くないのだが、お互いにそこまで干渉したがる質でなかつたことも関係している。

ただ、彼自身が望んでこの世界に配属されたということとは、知つていた。会つてから半年ほど経つた頃、偶々居合わせた飲み席でのことだ。奇特な奴だと、そんなことを思つたせいかよく覚えている。彼にも、抱えている何かがあると感じられた。

ともあれ、班長が言うように——認めるのは非常に癪だが——配属当初からキツカとよく行動を共にしていたお陰か、ルクラは彼基準でのそれなりな進歩を果たしていた。当初は、どうやって訓練校を卒業したのかと疑つたほどに気が弱かつたのだが、今では目の前で人間が一人吹っ飛んでも悲鳴をあげないぐらいには、腰が据わっている。

思い返すと、キツカが持ち込んだ厄介事で一番割りを食つていたのは、巻き込まれまくつていた彼かもしれない。そりゃあ、根性も付くか。でもまだまだなんだよなあ。もしくはキツカが求めすぎているだけなのだろうか。

「しかし、キツカよう」

部下二人について談じていれば、班長がいつの間にも用意したのか、キツカから見れ

ば不愉快な顔——言うなれば微笑ましいモノを見るぬるまった笑み——で、突然言葉を挟んだ。嫌な予感がする。こういう時の直感には往々にして的中率が高いのだから、やりきれない。

「……なんすか」

「いや、な。なんだかんだ言いながら、結局いい先輩してんじやないか、お前も。陸曹どのに後進を預けたのは、あながち間違っちゃいなかったように嬉しいね」

「……なんか、不穏当な言い分ですね。何企んです？ 今日だって、ジャンケン負けた私に二人押し付けて。あれ、年功序列の振りして意図的に私ら三人残したでしょ」

「シー？ 聞こえんなあ？ さあて、世間話はこれぐらいにして、そろそろ上がろうぜ。いやあ、やはり部下との交流は大事だな。こうして互いの理解を深めることで、我らが班の結束は固くなってゆくのだよ」

傍目にも嘘臭い単語を羅列する上司に、キツカは精一杯の嫌な顔で答えた。具体的には、一週間貯めた生ゴミの袋をぐんにやり踏んづけてしまった時のような、腹の底からの嫌な顔である。

「くつくつく、まあ、精々楽しみにしとけ」

それを捨て台詞に、班長はどうに空になっていたマグカップを回収すると、軽やかな足取りでオフィスを後にした。ぽつねんと残されたのは、キツカ一人。気がつけばか

なり時間が過ぎていたのか、窓の外は真つ暗である。夜になれば魔力光も闇の帳へと吸い込まれ、碧の空は穏やかに暗く染まっていた。

急に静かになったオフィスで、ぽつりと呟く。

「流行つてんのかね」

こんなやり取りを、少し前にもした気がする。あからさまな『何かあるぞ』アピールを一日の内に二回経験するとは。貴重な経験だ。嫌な貴重もあつたものである。

休憩していた筈なのに、えもいわれぬ疲労感がキツカを襲つていた。盛大に溜め息を吐いて、おもむろに立ち上がった。ついでに伸びをすれば、関節が小気味のいい音を立てる。無性に疲れていた。書類の提出は、明日でいい。こんな日は、熱いシャワーを浴びてさっさと寝るに限る。

陸士の宿舍は支部と同じ敷地内にあり、地続きになっている。お陰でわざわざ外に出る必要もなく、キツカは人気のまばらな通路を歩く。

職務は夜勤組に引き継がれ、今は勤務外。自由時間である。市街に繰り出している輩も多くいるだろう。件のサンバーなど、先輩に連れられ悪い遊びに連日連れ回されていた。娯楽の総量で言えばクラナガンの方が当然ながら充実しているのだが、この世界の混沌とした歓楽街には男達を魅了してやまない野放図な魅力でもあるのだろうか。

女の身であるキツカには、多分分らない世界だ……そう言うことにしていた方

が、体裁がいい。

ふあ、と欠伸を一つ。誰も見ていないので、大口を開けてしまった。どこかの次元世界にいるはずの友人が見れば、これだからキツカはと嘆いたことだろう。思つた以上に、眠かつた。下手をすれば、部屋に帰るなりそのままベッドに倒れ込んでしまひそうだった。

五分ほど歩けば部屋に着いた。心なしか覚束ない動作で、キツカは隊服を脱ぎ、無造作にラックに放つた。スカートも皺ができないように延ばして、こちらも放る。ワイシャツ一枚になったところで、やはり力尽きた。そのままの格好でベッドに沈む。シャワーは明日の朝に浴びればいい。

微睡む頭には、様々なことが浮かび、渾然として消えていく。その中には、父のこと、後輩のこと、上司のこと、己のこと、あらゆるものが混ざつていた。

ふと、とある言葉が浮かび上がる。それを言つた父の顔も、同じようにまぶたの裏に鮮明に甦つていた。幼い記憶。あれは、五歳ぐらいの頃だつたか。

『なに、喧嘩を売られた？ 相手は？ 男子？ 買つたのか。それでこそ我が娘だよ。勿論目を狙つたんだらう？ ん？ 相手の親に怒られただつて？ 子供の喧嘩に親が口を出すなんて、無粋な話だ。それなら、目を狙うのは止めときなさい。保護者呼び出しとかされたら、キツカも面倒だらう。じゃあどこを狙えばいいかつて？ 決まつてる



としていたキツカに、上司からの呼び出しが入った。しかも直近の上役ではなく、二、三段階すつ飛ばした陸士部長からの呼び出しである。ヒラの陸士であるキツカが名指しされるなど、正直言つて御免被りたかつた。

とはいえ、命令は命令である。木つ端役人でしかないキツカは観念して、ひそひそと後ろ指を指す同僚達に見送られながら、部長室に出頭した。

学生時代の職員室がアウエーであるように、上司の部屋というものはそれだけで忌避したい場所である。自らに落ち度がなくとも、それは変わらない。いや、ないはずだ。ない、と思う。不安に後押しされてか、頭を過るのは減給とか懲罰とか、嫌な単語ばかりである。厳めしいと評判の陸士部長の響めつ面が、目に浮かんだ。

ところが、部屋に入った直後に彼女の目に入ったのは、アルカイックスマイルを浮かべた二人の中年男性であった。一人は陸士部長、もう一人は――

「班長？ どうしてこちらに」

「よく来たなキツカ。それは、追つて話す。まずは、部長から通達及び辞令がある」

デスクにどつしりと構えた陸士部長の側には、直接の上司たる班長が立っていた。表情には出さないが、キツカは回れ右をした気分だった。朝つばらから見せられるには、野郎二人の笑顔はあまりにも胡散臭く、嫌な予感しかない。ふと、直感した。先日『嫌な予感』も、この件に違いないと。

案の定陸士部長の切り出した話は、キツカが想像していたのとは別の部類で厄介なものだった。

「異常現象、でありますか？」

「うむ、近頃幾つかの班から報告が上がっていてな。その頻度から見ても、そろそろ放置できる段階を越えたために、この度調査に乗り出すこととなった」

なんでも、『魔法の発動がうまくいかなくなる』事態が、現場のあちらこちらで確認されているらしい。最初は当事者達もデバイスの不調や本人のミスを疑っていたのだが、それらの要因を廃してもまだ続いているようだ。酷いときには、『発動していた魔法自体が消滅する』らしい。

これは、魔力濃度の濃いこの世界では考えられないことだった。魔力が多いということはそれだけ魔力結合力も強くなり、リンカーコアを持つ者ならば余程のポンコツでもない限り魔法の使用は楽になる。

確かに異常現象である。だが、そうなると話結構な大事ではないのか。ひいては支部全体に関係する問題となりうるならば、近々大掛かりな調査部隊でも組織すれば良いのでは……？

そんな疑問が顔に出ているのだろう。陸士部長は話題の深刻さにも関わらず、不動のアルカイックスマイルを浮かべたまま言葉を続けた。逆に怖い。



「やがては支部全体の課題となるが、今は総合的な情報量が少なすぎるのだよ。そこで、当面の情報収集と初期調査を目的とした部隊を、私の監督下で派遣することになった。現場レベルでの違和感を細微な点にまで拾えるだろうとの部長会の判断だ」

部長会と言うのは、支部長直下の最高意思決定機関である。クラナガン地上本部から委ねられた裁量権の範囲内で支部の方針・対策を策定していくのである。各部門の部長クラスからなるこの会議は権威も高く、ここでの決定はほとんど支部の最終決定である。

「こうした問題での初期調査は最終段階までの指針となるからな。現場を知らない奴らに見当違いな推論を立てられても困るだろう。その点では、我々陸士部隊以上に実情を知る部署はない。我々の手柄……ごほん、責任を果たすためにも、本件の担当をぶん捕ってきたのだよ」

言い切った部長の、なんと自慢げなことか。やけにテカテカした顔をしていると思えば、なんてことはない。

こうした事件性のある議題では、支部内で一定の地位を持つ『本局』からの出向組——所謂『天下り幹部』が強権を発動して、担当をかつ拐っていくことが度々ある。機嫌がいいのは、普段から折り合いの悪い彼らを部長会でやり込めることが出来たからだろう。要はドヤ顔であった。

「そんなことが……。しかし、初めて耳にしましたが」

「そうだろうな。会議はオフレコで行われた。全隊への通達はこれからだからな」

ふむ、成る程。ここまではいい。この話自体は、キツカにも異論はなかった。実働する自分達が調査方針をある程度決められるは、無駄な軋轢を生まない喜ばしいことである。

しかし、根本的な疑問は解決していなかった。

「あの、部長、どうしてその話を私などに……。？」

重ねて言うが、キツカはヒラの、正確には平よりちよつと上ぐらいの一陸士である。このような情報を部長から直々に伝えられるほどの責任者ではない。

しかもまだ未開封の情報をいち早く聞かされたのだという。これは絶対に何かの前フリだ。

班長が言った『通達』とはこれであろう。ならば、もう一つの『辞令』というのが、このあとに控えている。陸士部長も、それまでの弛んだ面をキリツと引き締め、常の厳かな空気を纏い始めた。

ほうら、来るぞ。

「うむ。調査部隊の人員を決めるに当たって、私は各班長に意見を求めた。これは臨時業務であるから、通常業務を維持しつつ隊員を選出せねばならなかったのだな。調整に

は難航した」

「はい」

「そこで、そこにいるハリアー三尉から具申があつてな。『私の下に、階級は低いが使え  
る人間がいる』とな」

「それで……」

「そう、君の名前が上がった。これに当たつて君の業績を確認したのだが、成る程中々優  
秀であると判断した。他班長からの強い推薦も無かつたことだし、ならばと言うわけ  
だ」

それは、つまり、そういうことか。光栄に思いたまえよ、と言わんばかりの部隊長  
に気付かれないように、キツカは横目に班長——ハリアー陸三尉を睨み付けた。余計な  
ことしてくれやがる。そんな部下の怨念も、彼にとつては苦にもならない。むしろ笑い  
飛ばす人間である。あのアルカイックスマイルは、大笑いを堪えるための微笑であつ  
た。

「キツカ・ナカジマ陸曹」

「はっ」

陸士部長が、ミッドチルダには珍しい響きの音を、異世界の文化に由来を持つ、キツ  
カの名を呼ぶ。

呼応、敬礼。背筋をピンと伸ばし、おまけに踵を打ち鳴らしてやれば、最高だ。訓練校で叩き込まれた一連の動作は、反射的に返せるぐらいには体に染み着いていた。

「仮称『魔力減退現象』と名付けられた当件の初期調査部隊の隊長に、陸曹を任命する」  
「はっ」

「これは特命である。当部隊は特務部隊として招集されるため、その職責は重要である。隊員および隊内人事は追って通達するが、彼らの指揮はナカジマ陸曹が一任するものとする」

「はい」

「これに当たって指揮権強化のため、陸曹を一階級昇進させることとなった。本時刻より、君はナカジマ陸曹長となる。おめでとう」

「はっ、有り難う御座います」

ここまで言つて、陸士部長は厳格な声音を少し緩めた。

「これは陸士部隊の沽券を懸けた任務だと心したまえ。君には期待しているよ」  
「はっ、全力を尽くす所存であります」

キツカの返答に満足したのか、陸士部長は二、三度鷹揚に頷くと、退出の許可を出した。一礼し、促されるままにキツカは部屋を出る。女には高い身長に灰色の長い髪が靡き、その一挙手一投足は様になっていた。内心は、いざ知らずである。

外面にはクールを気取りきった彼女の頭では、先日思い出した父の教訓がぐるぐるとリフレインしていた。

『眉間を狙うと出世できるのさ』

——マジだったかよ。

◇◇◇

扉を潜っていくその後ろ姿を見て、部屋の主である陸士部長は、うむ、ともう一つ頷く。そこから首も動かさず、控えていたハリアーに無言で問い掛けた。

ハリアーは、分かっているとばかりに一言。実績があると云つてもたかだか陸曹を一部隊の責任者に推薦したのは、彼なのだ。

「ええ、あれは私の部下です。陸曹長がミスをした時には私が責任を取ります」  
「仕出かしてからでは困るのだがな。まあ、君がそこまで言い切るからには、期待外れにならないことを願うよ」

特務といえど、初期調査と情報収集が主務の当部隊の規模は大きくない。通常シフトに換算するならば、一班レベル、四人から八人の少数部隊である。

だからこそ、陸曹長クラスの階級でも責任者が務まる。本来ならば陸曹でも班長程度なら任せられるのだが、この場合の昇進は主に対外的な、陸士部隊以外への影響を考慮

してのものでもあった。

キツカを推したハリアーには、一つの思惑があつた。と言うのも、この任務を通じて現場指揮官としてのキツカを育てようと画策していた。

陸士部隊は、慢性的に人で不足であるが、今のハリアー班は八人。それもそこそこの古参が班長を含めて五人おり、補充の新米が多い他所に比べればまだ余裕があつた。いくらか班員が抜けても、カバーする余地がある。

ここで彼女を育てることは、今後に意味を持つだろう。それだけの価値、素質がキツカにはある。ハリアーはそういう意味でキツカを買っていた。

「五年もこの世界にいて、逃げ帰る素振り一つ見せない女です。応えて見せますよ、あいづなら」

そんな親心にも似た上司の信頼があつたことを、キツカはまだ知らない。

⇒ T o b e c o n t i n u e d